

小学校英語教育の目標と評価方法に関する考察

島 谷 浩

A Study of Objectives and Evaluation of Elementary School English

Hiroshi SHIMATANI

Key words : elementary school English, evaluation

1. はじめに

文部科学省(2013)は、平成25(2013)年12月に公表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」において、小学校英語の教科化を平成32(2020)年度から全面実施すると発表した。平成29(2017)年3月に公示された次期学習指導要領において、現在小学校高学年(第5, 6学年)で実施されている「外国語活動」を中学年(第3, 4学年)で開始し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から「読むこと」、「書くこと」を加えた総合的・系統的な教科として「外国語」を導入することとした。教科としての「外国語」は、平成30(2018)年に先行実施される地域があり、子どもの発達段階を踏まえた評価のあり方の検討が急務となっている。本稿において小学校英語の評価のあり方について議論する。

2. 小学校外国語活動と小学校外国語の目標

次期学習指導要領で示された「外国語活動」と「外国語」の目標は、次の通りである(文部科学省, 2017a)。

小学校外国語活動の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
- (2) 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり

話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。

- (3) 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

具体的に、英語学習の目標としては、「聞くこと」、「話すこと(やり取り)」、「話すこと(発表)」の三つの領域別に設定されている。

「聞くこと」においては、ゆっくりはっきりと話されたという条件のもとではあるが、①自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取る。②身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味を理解する。③文字の読み方については、発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かる。

「話すこと」については、「やり取り」と「発表」に分けられて目標を定めている。これは、小学校英語と中学校英語でも同様であり、改訂前の「小学校外国語活動」とは違い、小学校英語、中学校英語への接続が意識されている。

「やり取り」では、①基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じる。②自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合う。③サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問をしたり質問に答えたりする。

「発表」では、①身の回りの物について、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話す。②自分のことについて、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話す。③日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを簡単な語句や基本的な表現を用いて話す。

小学校外国語の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

1. 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付ける。
2. コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いた話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

3. 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

具体的に、英語学習の目標としては、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やり取り）」、「話すこと（発表）」、「書くこと」の5つの領域別に設定されている。

- (1) 「聞くこと」については、①ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができる。②ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができる。③ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができる。
- (2) 「読むこと」では、①活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができる。②音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かる。
- (3) 「話すこと（やり取り）」では、①基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができる。②日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができる。③自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして伝え合うことができる。

- (4) 「話すこと（発表）」では、①日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができる。②自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができる。③身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができる。

- (5) 「書くこと」では、①大文字、小文字を活字体で書くことができる。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができる。②自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができる。

現行学習指導要領（文部科学省、2008）で必修となった高学年での「外国語活動」の目標は、①「言語や文化に関する体験的な理解」、②「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」、③「外国語への慣れ親しみ」の3観点に重点が置かれていたが、今回の改訂では、中学年の「外国語活動」と高学年の「外国語」のどちらも次期学習指導要領における資質・能力の三つの柱である①「知識・技能」、②「思考力・判断力・表現力等」、③「学びに向かう力・人間性等」の3観点により詳細で具体的な目標が示されている。この3観点の目標は、中学校の外国語でも同じ観点から目標がさらに深化した形で定められており（文部科学省、2017b）、小学校外国語活動、小学校外国語から、中学校までの英語教育の目標に一貫性を持たせた英語教育を構築しようとする意図が見られる。

3. 小学校外国語活動と小学校英語の評価

平成23（2011）年に必修となった小学校外国語活動は、単に知識や技能の習得を目的にしておらず、観点別評価を総括した評定を出さないこともあり、評価について明確な基準はなくても大きな問題とはならなかった。観点別学習状況の評価については、平成22（2010）年の文部科学省初等中等教育局による通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善について」の中で3つの観点（①コミュニケーションへの関心・意欲・態度、②外国語への慣れ親しみ、③言語や文化に関する気付き）で評価されることになったが、「教科のような数値による評価はなじまない」（中央教育審議会答申、2008）とされ、A、B、

Cの評価や3, 2, 1の評定はつけずに文章で記述されることになっている。

改訂後の「外国語活動」については、現在の評価方法が踏襲される公算が高いと思われるが、「聞くこと」「話すこと」について、学習・指導の指針となる、より客観的な評価情報が与えられるべきであろう。馬場(2011)は、「個人カルテ」の作成を通して、児童ひとりひとりの学習状況を可視化した実践を報告している。

小学校英語の評価については、評定がつくことになっているが、不適切な評価が児童・生徒の学習意欲をそこなう可能性があるという懸念がある。現在の小学校教員の大半は、教員免許を取得する際に英語を指導することが想定されておらず、そのため「小学校英語」を指導するための指導法を学んだわけではない。児童の英語学習が成功しているノルウェーにおいては、13歳までの児童は、テストによる評価を受けていないと報告されている(Hughes, 2003)。また教員、児童、保護者の三者で話しあい、無理なく児童の学習を進めていくことを方針としているデンマークの公立小学校では6学年までテストをせず、成績もつけないことになっている(西尾, 2011)。「小学校英語」については、しばらくの間、評価情報の収集のみにして、評定をつけないという選択も考慮に値しよう。たしかに、評価は、学習、指導と三位一体を成しており、評価なしの指導はありえない(バトラー, 2005)が、評価を1)学習への動機付け、2)学習者の達成度や進歩の状況の評価、3)教師へのフィードバックなど指導改善のための機能(土屋・広野, 2000)のみに利用するという考え方もあるのではないか。教科となったら、評定がつくのが当然ととらえても、不適切な評価を受けることで子どもの英語学習意欲をそいではない。

早期英語教育における望ましいテストの指針としてHughes(2003)は、次の3点を指摘している。1)テストは、評価の一環として、そして評価は、指導プログラムの一環として統合的に組み入れられること、2)テストの結果、ならびに評価のフィードバックは直ちに行い、かつ肯定的なものにすること、3)児童による自己評価が、指導プログラムの一部として取り入れられること。このように小学校外国語活動と小学校英語に適切なテストは導入されるべきであるが、評価情報を収集するのは、成績を付けることが目的とは限らない。小学校英語に関して、小学校教員が自信を持って安定した評価ができるようになるまでには、相当量の研修と経験が必要で、当分の間はそのための時間が必要と思われる。

外部テストとして、小学生を対象とした英語能力

テストが存在するが、それらの多くは、英語能力の測定と同時に英語学習への動機付けとなることを目的としている。代表的なものとして、聴解力を測る形式の「英検Jr.(旧児童英検)」や「国連英検ジュニア」、聴解力とスピーキング力を測る「JAPEC児童英検」、聴解力、読解力、ライティング力、スピーキング力を測定する「ケンブリッジ国際児童英検」などがある。これらのテスト専門機関によって作成された英語能力テストの評価は、小学校外国語活動や小学校英語で取り扱う内容と呼応しているとは限らないので、学校内で活用する際にはその成績の解釈に注意が必要であるが、教師自作のテストに比べて信頼性、妥当性の面で安定しており、適切に利用すれば、学習者にも指導者にも適切な評価情報をもたらし有益である(島谷, 2016)。

中学校入試における小学校英語の扱いが懸念されているが、金森(2015)は、平成27(2015)年度の東京都内の中学校入試で英語を選択科目に課している学校がすでに30数校あると報告している。中学校入試で英語に関する知識や文字言語としての英語力が重視されすぎると、小学校における音声言語としての英語力養成に悪影響を与えることが危惧されている。小学校英語での音声を使った「聞くこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」の適切な評価の確立は不可欠である。この点をおろそかにすると、中学校以降の英語教育に対する波及効果はたいして期待できない。

児童・生徒の英語学習に対する意欲をのばす評価について、実践を通して更なる研究が望まれる。平成27(2015)年度英語教育強化地域拠点事業での研究成果報告(文部科学省, 2016)によると、93.8%の小学校が設定した学習到達目標に達するため、指導方法の工夫・改善を行っていると回答しており、また94.7%の小学校が評価方法の工夫・改善を行っていると回答している。そのうち、58.9%にあたる小学校で、インタビュー(82.8%)やスピーチ(67.2%)などのパフォーマンス評価が実施されている。しかしながら、ライティングに関するパフォーマンス評価の割合は15.9%にとどまっていたことがわかった。研究校ばかりでなく、一般の小学校においても評価研究に積極的な教員が増えることを期待したい。

4. 終わりに

平成29(2017)年3月に公示された次期学習指導要領の「外国語活動」と「外国語」の目標を検討し、その評価の在り方について考察し私見を述べた。英

語教育が大きな変化に直面しているわけであるが、小学校英語教育の適切な評価については明確になっていない段階で、小学校英語教育が先行実施されようとしている。小学校教員による小学生の英語力評価方法確立の重要性が認識され評価に関する研究の高まりを期待したい。

参考文献

- 金森強 (2015). 「格差を広げる小学校英語教育？」 Retrieved from
http://www.eiken.or.jp/eiken-junior/enjoy/welcome/detail02/detail_24.html
- 酒井英樹 (2014). 『小学校の外国語活動 基本の「き」』 東京：大修館書店
- 島谷浩 (2016). 「子どもの学習者の言語力の評価」『日本言語テスト学会誌 (20周年記念特別号)』, 19, 165-167.
- 中央教育審議会 (2008). 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)』 Retrieved from
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf
- 土屋澄男・広野威志 (2000). 『新英語科教育法入門』 東京：研究社出版
- 西尾由利子 (2011). 「世界一しあわせな国デンマーク 話し合い重視の英語教育」『小学校の英語教育 多元的言語文化の確立のために』 pp. 92-111. 河原俊昭・中村秩祥子 (編著) 東京：明石書店
- バトラー後藤裕子 (2005). 『日本の小学校英語を考える』 東京：三省堂
- 馬場直子 (2011). 「小学校外国語活動における評価の可視化—客観的な評価基準作成の試み—」 *STEP BULLETIN*, 23, 68-80.
- 文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領外国語活動編』 東京：東洋館出版社
- 文部科学省 (2010). 小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善について (通知) 別紙5『各教科等・各学年等の評価の観点等及びその趣旨 (小学校及び特別支援学校小学部並びに中学校及び特別支援学校中学部)』 Retrieved from
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/nc/_icsFiles/fieldfile/2012/08/07/1292899_01_1.pdf
- 文部科学省 (2013). 『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』 Retrieved from
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/fieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf
- 文部科学省 (2016). 「平成27年度英語教育強化地域拠点事業における取組状況 (小学校)」『小学校における外国語教育の充実に向けた取組 (カリキュラム, 教材, 指導体制の強化)』 Retrieved from
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryo/_icsFiles/fieldfile/2016/03/22/1368720_5.pdf
- 文部科学省 (2017a). 『小学校学習指導要領』 Retrieved from
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf
- 文部科学省 (2017b). 『中学校学習指導要領解説外国語編』 Retrieved from
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2017/07/25/1387018_10_1.pdf
- Hughes, A. (2003). *Testing for Language Teachers*. 2nd Ed. Cambridge: Cambridge University Press.